

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463256

研究課題名(和文) 看護学生への社会的スキル育成介入が看護技術習得におよぼす効果の縦断的検証

研究課題名(英文) Longitudinal verification of the effect of social skill upbringing intervention on nursing students' acquiring nursing skills

研究代表者

船木 由香 (Funaki, Yuka)

関東学院大学・看護学部・講師

研究者番号：10389942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究期間中、学生の社会的スキルと学習資源活用に関する調査及び社会的スキルと仮想場面から情報を捉える力の関連について調査を行った。

学習資源に関する調査では協力者が少なく統計的検討ができなかったが、援助準備や振り返りにおいて、社会的スキルの高い学生は低い学生に比べ、対人的な資源を多く活用する傾向にあった。仮想場面から情報を捉える力については4年生で社会的スキルとの関連を示唆する結果を得ており、現在論文投稿の準備中である。社会的スキル育成介入プログラムについては、現在検討段階である。なお、本研究と関連の深い情報の捉え方については、期間中学会発表を2回、論文を1本発表した。

研究成果の概要(英文)：During the period of this study, we also examined on between students' social skills and learning resource utilization as well as between social skills and the ability to grasp information from a virtual scene.

In the examination on learning resource utilization, only a few students collaborated, so that we couldn't conduct it statistically. However, in terms of aid preparation and recapitulation, students with high social skills tended to utilize interpersonal resources more than those with low social skills. About the ability to grasp information from a virtual scene, we obtained the result suggesting relation to social skills from senior students. Currently, we are preparing to submit a paper. Concerning the intervention program for social skill development, we are in the stage of review. Moreover, about how to understand information closely related to this study, we made the presentation twice at conferences and published a paper during the period.

研究分野：基礎看護学

キーワード：社会的スキル 学習資源 クリティカルシンキング 基礎看護技術 情報収集

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、基礎看護学実習における看護技術習得と社会的スキルの関連から、看護技術習得における社会的スキルの重要性を明らかにし、学生が看護技術を対象者であった技術へと発展させるための能力育成に向けた教育法を開発するための基礎的研究である。

技術の科学的習得方法について深井は、技術と理論を並行して学ぶことで飛躍的な上達が望め、技術習得の近道となる「コツ」を教えらることで習得度の個人差が減り理論的思考も同時に身に付くことを指摘している。しかし、この過程において、教員や指導者から教えられることを受け身で待っているのではなく、主体的に教員や指導者にアプローチできることでさらに深い学びに繋がると考えられる。自ら実施した援助に関する疑問を明らかにし、その点を解決できるよう積極的に行動することは、他の学習への効果も期待できる。この自ら発信していく力として、本研究では社会的スキルに着眼した。また、基礎看護学技術のなかでも、直接的な技術だけではなく、観察や思考、更に技術習得のための学習資源活用範囲に関して検討を行った。

看護教育における臨地実習と言うカリキュラムは、学内で学べないことを有形・無形に学ぶ機会にあふれており、学内で学んだ知識・技術を臨床の場において実践していく。そこでは見学・質問・体感するなど様々な学習方法が存在する。特に看護師や指導者など臨床実践能力に長けた者から得られる実践知、対人的なかかわりを通し、学生は多くの学びのチャンスがある。看護技術が習得できたと考える学生は教員の指導を活用していたという報告もあり、側にいる教員や看護師を活用できるか否かは学生の対人スキルによるところも大きい。つまり、円滑な人間関係が形成できることと技術習得には関連があるのではないかと考えた。もちろん患者との人間関係は言うまでもない。

人間関係を築く力として社会的スキルがある。社会的スキルとは、対人関係を円滑にするスキルであると菊池(2007)は言っている。相川ら(1996)の生起モデルによれば、自分の経験や知識等のデータベースをもとに、相手の反応を読み、どう反応するかを決定し、それに伴う感情をコントロールしながら、実際にどう行動しようかと考え、実行するという内容である。社会的スキルを実習等におけるさまざまな出来事と照らし合わせてみると、実習では主体的で責任のある行動を求められる。挨拶に始まり、対象の安全安楽を考え、心身の痛みや不安を肌で感じるようになる。看護実践では看護師や教員の指導のもと、実習目標に達するよう見通しを立て、計画的に実習を進めなければならない。実習は、これまでの受動的な学習スタイルとは大きく異なり、日々変化する患者の状況に合わ

せた臨床現場である。学習途上の学生にとって、日々変化する患者への看護は難しく、看護師や教員の指導なしでは実習が展開できない学生も多い。実習はある種ストレスであることはこれまで多くの研究報告があり、ストレスフルに感じた人間関係の対象は看護師と教員であったと報告がある。对患者だけでなく、人的な実習環境との関係をうまく調整していくことも重要な要素となることがわかる。社会的スキルはまさに臨地実習を学習するためのスキルであるといえる。従って、特に実習において、社会的スキルは看護技術をはじめとした看護実践能力獲得に関する重要な要因であると考えられる。

看護における社会的スキルに関する研究は、実習の前後で社会的スキルが向上すること、学生の日常生活と社会的スキルの関連、社会的スキルとストレス耐性に関する研究などがある。しかし、看護学生を対象とした社会的スキルと技術習得に関連した研究はほとんどない状況である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は看護学生の看護技術習得における、社会的スキル育成介入による効果を明らかにし、技術習得における社会的スキルの重要性を明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

#### 1) アンケート調査

(1) 研究対象者：看護学生 4 年生のうち、研究協力の同意の取れた者

#### (2) 調査の内容

・臨床場面を想定した仮定の 2 場面(静止画と動画)を見て、気になるところ(気がかりなところ)やその理由を記載してもらう。更に観察が必要な点・何が起きていると思うのか等を記載してもらう。

・社会的スキル(Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版)へ回答してもらう。

(3) 分析方法：気になるところおよびその理由を得点化(看護的視点の有無)し、社会的スキルとの関連を検討した。

#### (4) 倫理的配慮

対象者が学生であるため、倫理的配慮等の審査が必要であると判断したため、所属する機関の研究倫理審査委員会に審査を申請し、承認を得てから研究を開始した。

#### 2) アンケート調査

(1) 研究対象者：看護学生 2 年生で基礎看護学実習を履修する学生で、研究協力の同意のとれた者

#### (2) 調査の内容

・Kiss-18 と実習中実施可能な 2 援助技術(血圧測定技術、環境整備)について、技術の巧緻性 技術を支える知識の深まり 実施前の準備と実施後の振り返り について記載してもらう。

(3) 分析方法： それぞれについて、

社会的スキルとの関連を検討する。

#### (4) 倫理的配慮

対象者が学生であるため、倫理的配慮等の審査が必要であると判断したため、所属する機関の研究倫理審査委員会に審査を申請し、承認を得てから研究を開始した。

### 3) 社会的スキル育成介入方法の検討

社会的スキル介入育成方法については現在検討段階である。

#### 4. 研究成果

##### 1) アンケート調査

社会的スキルと看護的視点の関連について、4年生の検討を行った結果である。

社会的スキルと看護的視点の得点(看護的視点の有無を得点化した)には有意な差があり、社会的スキルの高い学生は看護的視点の得点が高い結果であった。更に得点を細分化し、環境に関する看護的視点得点にも有意差があることが分かった。

なお、アンケート調査に先行して行った看護的視点得点に限定した内容については以下の通りである。

学生が気になると回答した理由を分析してみると「状況の記述のみであり自分自身の判断を含まない記述」「一般的・常識的な内容の記述」「一般的・常識的な内容とも看護的内容ともとれる記述」「看護的内容の記述」に分類することが可能であった。これを得点化し検討した結果学年の違いで得点に差が見られ、高学年の方が優位に高い結果となった。これは1年生からの学習や、3年生の看護学臨地実習による経験の成果であると考えられた。学年進行により経験を積み、知識の再構造化が行われていると考えられる。

社会的スキルを加味した内容については現在投稿の準備中である。

##### 2) アンケート調査

研究協力者が少なく、統計学的検討を加えることはできなかったが、アンケート結果からは、技術習得は回数を重ねること上達していく傾向があった。また、実施前準備や実施後の振り返りでは、社会的スキルの高い学生は低い学生に比べ、実習メンバーや教員・指導者、患者など対人的なかかわりを活用している傾向があった。

### 3) 社会的スキル介入育成方法について

社会的スキル介入育成方法について現段階での概要について述べる。

このプログラムは、看護学生として初めて経験する臨地実習に、スムーズには入れることを目指し作成した。社会的スキルにはさまざまな捉え方があるが、本プログラムでは「ひととうまくやっていくスキル」と捉え、さらに、看護学生が臨地実習で必要となるという要素を加え、そのスキルの向上を目指すものである。社会的スキルはトレーニングに

よって習得可能なスキルとされていることから、本プログラムの作成の意義は大きい。

これまでも社会的スキル習得のためのプログラムはあるが、一定の期間を要するものが多い。しかし、本プログラムは臨地実習前の短期間でも実施可能なプログラムの作成を目指している。そこで、本プログラムでは社会的スキルのなかでも特に臨地実習に必要と考えられるスキルを抽出し、そのスキルの向上を目指すものである。

これまでの、社会的スキルと看護学実習での経験に関する先行研究から、実習前後で社会的スキルは向上するという結果を得ている。そして、その向上の原因と考えられる、臨地実習での経験内容も明らかにされつつある。本プログラムでは、臨地実習での経験に近い課題を実習前にプログラムとして課すことにより、これまで臨地実習で経験し、結果として社会的スキルが向上していたものを、あらかじめ社会的スキルが向上した段階で臨地実習に臨むことで、臨地実習での学習効果のさらなる向上を目指す。また、臨地実習に対する予期的な不安を軽減することで、実習中のストレスも軽減し、学生本来の力を発揮できると考えられる。

実習中、対象と会話をすることで生や死、家族の絆などを考え、多くの学びを得ることは実習中でしか学べない内容であるが、対象と深いやり取りができる、この段階にまで達することに時間を要する学生が多い現状がある。それはIT社会と言われる現代社会の副産物と言えよう。看護は対人援助職であり、人と人のやり取りなしでは成立しない領域である。また、カリキュラムの改訂等により臨地実習の時間は減少しているものの、看護が担う社会的役割は幅広くなってきている。このような社会や看護教育における変化から考えて、本プログラムの作成・実施で、学生の社会的スキルが向上することで効果的な学習ができることの効果は大きいと考えられる。

#### 《プログラムの概要》

##### (1) 取り上げる社会的スキル

挨拶をするスキル

自己紹介をするスキル

質問をするスキル

グループメンバーとうまくやっていくスキル(依頼する・断る・謝る)

##### (2) 方法

について

SP(模擬患者)を導入し、のスキル向上を目指す。

これまでも学生間で患者役看護師役となり演習をするという事は行われているが、見知らぬ他者に自分を明らかにする経験はほとんどない。他者と対峙した時の自分の感覚および相手の反応も確認しながら実施する必要がある。自己紹介をし、これから行う援助の説明と同意を得ることを目指す。

について

学生は実習中、担当の看護師に質問や報告をする場面がある。しかし、多くの学生が忙しく動き回る看護師に対し、いつ質問をしたらいいのか、どのような報告がよいのか、突っ込まれたら（質問されたら）どうしようという不安を抱え、看護師や指導者とのコミュニケーションの取り方にエネルギーを使っている現状がある。従ってここでは、どのように看護師に声をかけるのかモデルを示しながら考える。良い例、悪い例など複数示しながら、実際の実習場面で活用可能な具体的な声のかけ方について考えていく。

について

学生は4~6名のグループを作り、実習に臨む。しかし、同じ講義室で講義を受けていても、全員とコミュニケーションをとったことはなく、比較的少人数で同じグループで学校生活を送っていることが多い。従って、実習グループとなり、初めて話をしたという者同士がグループとなることも珍しくはない。臨地実習は同じメンバーがグループとなり、半年近い実習を展開していくことも多く、実習と言う学習方略は学習面だけでなく人的な問題を持つことも多い。従って、グループメンバーとうまくやっていくことは実習を展開していくうえで大きなアドバンテージとなる。実習前によりグループダイナミクスを作ることが大切である。自己紹介だけでなく、課題として問題場を提供し、その問題に対し、グループでの解決を目指しディスカッションをすることで互いを知るきっかけを作ることを目的とする。

(3) 評価

本プログラムはまだ検討段階である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)なし

取得状況(計 件)なし

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

船木由香 (Funaki Yuka)

関東学院大学・看護学部・講師

研究者番号：10389942

(2) 研究分担者

塚本尚子 (Tsukamoto Naoko)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：40283072